

# かたりべ108

豊島区立郷土資料館だより

祝！八〇歳を迎えた千登世橋ちとせばし

JR目白駅前を東西に横切る目白通り（補助七六号線）

と、池袋駅前を早稲田から王子方面に縦断する明治通り

（環状五ノ一、補助一七一号線）が交差する地点（目白一

一）に、千登世橋が架かっているのをご存知でしょうか。

千登世橋は、豊島区が誕生した昭和八（一九三三）年に竣

工し、今年二月で満八〇歳を迎えます（着工は七年一月）。

橋長約二八m、有効幅員一八・二mの一径間鋼ヒンジア

チ橋で、東京で最初の立体交差橋といわれています（伊東

孝『東京再発見』、本誌二九号参照）。橋名は、明治初年か

らこの地が高田千登世町たかのみよせ

（着工当時は高田町大字

高田千登世）と呼ばれた

ことに由来します。

セピア色の写真二枚は、

本誌一〇四号で紹介した



①「環状線（明治通り）と王電バス」上のカラー写真は現在の千登世橋  
王電バスは昭和7年3月王子—池袋駅前—鬼子母神裏間が開通した。



②「放射線（目白通り）千登世橋付近と江戸川バス」  
江戸川バスは大正14年4月目白—江戸川間が開通した。

『高田町写真帖』に収録されている八〇年前の千登世橋の姿です。①は池袋から早稲田方面に向かって下り坂となる明治通りから撮影した写真で、幅員二二間（約二二m）の明治通りの右手に、幅員八間（約一四m）の連絡道路が設けられています。②は目白通りを目白駅方面に向かって撮影した写真で、千登世橋の親柱と高欄、その手前の王子電気軌道（現都電荒川線）に架かる千登世小橋、写真右側の巡查派出所（現千登世橋交番）は、今も当時の面影をとどめています。

開通当初から自動車や乗合バス、自転車や人が行き交う交通の要所として、千登世橋は豊島区の誕生とともに八〇年間、区の発展と地域住民の生活を支えてきました。これからも豊島区の行く末を見守り続けてくれることでしょう。

※本号六ページに関連記事を掲載しています。

（横山）

# 静岡県富士宮市人穴富士講遺跡「月三椎名町元講・三平上総介源信忠供養塔」調査報告

冬、高層ビルが立ち並ぶ合間から、わ

場所を人穴といい、聖地として伝えられ

刊行されています。「史跡人穴」(一九

3・4)。

ずかに見える冠雪の富士山。茜色に染ま

ています(写真1)。人穴は、富士山の噴

八八年・富士宮市教育委員会発行、A報

次頁に、調査で確認できた銘文を掲載

った夕暮れの空に黒く映える富士山。か

火でできた溶岩洞穴ですが、角行は、こ

告)は、発掘調査の成果とともに、所在

します。前に紹介した二冊の報告書のう

つては、自宅の庭先からでも望めたとい

こで四寸五分(一四センチメートル)角

する全碑塔の計測と銘文等の掲載をして

ち、刊行年の新しいB報告に倣って碑塔

う富士山へ、人々は地域の仲間とともに

の材木の切り口の上に立ち、一千日の立

おり、人穴の環境整備のための指針を打

の各面を①②③とし、①・②・③の各面

登拝しました。富士講による富士詣です。

行をしたということです。

ち出すことを目的とした四〇〇頁に及ぶ

の碑文の観察を行ないました。その結果

そして、その活動の痕跡を、富士山周辺

現在、人穴周辺には二三〇基を超える

大部のものです。もう一冊は、翌年刊行

を、B報告を底本として、修正を要する

の各所に遺っています。その中から、二

碑塔類が林立し、その中には豊島区ゆか

された「人穴浅間神社の碑塔と拓影」(一

部分についてはゴチック体で記しました。

〇一二年三月一九日、富士宮市の人穴富

りのものもあります。二〇一一年三月一

九八九・富士市立博物館発行、B報告)

一方、足場の不安定さから③・④・⑥は

士講遺跡で行った調査の報告をします。

五日深夜に起きた静岡県東部地震で富士

で、前報告掲載の銘文を再検討した結果

調査できませんでしたが、B報告に掲載

■修行の地・人穴

宮市域も被災し(同市は震度六強)、人穴

を収録したもので、それぞれの拓本も掲

された拓影の観察から一部を修正しまし

一六世紀末、長谷川角行は修行を重ね、

でも多くの碑塔類が倒れ、調査のときに

載しています。

た。また、旧字・異体字等は、現代表記

富士講の始祖となりました。その修行の

は復旧作業が行なわれていました(写真

今回の調査はこの先行する調査・研究

に改めています。



写真1；富士講聖地「人穴」正面



写真2；急ピッチで進められていた、地震で倒れた碑塔類の復旧作業

2)。そこで、復旧作業をしてい  
た担当者の方の  
許可を得て調査  
させていただきました。  
■石に刻む区内  
の地名・人名  
人穴に所在す  
る碑塔類につい  
ては、すでに、  
二冊の報告書が



写真3；月三講講祖 三平上総介源信忠供養塔(石塔右側が裏面)



写真4；『報告書』を参考に供養塔の銘文を読む  
約200年の歳月に風化した部分もあり、解説には  
時間がかかりました。

① (正面) 三平上総介源信忠

講紋 光山院浄照信士

文化二乙丑四月廿八日

② (右面)

(一段目) 長崎村同行

三十四人

油屋三右工門

大和屋平八

慶徳屋藤右工門

佐久間辰五郎

前場孫七

(二段目)

前場孫左工門

篠重左工門

岩崎彦左工門

鴨下政五郎

池袋村同行十八人

古口半治郎

上落合村同行十人

(三段目)

加藤伊之助

高田治助

宇田川新右工門

附木屋文治

葛ヶ谷村同行九人

鈴木庄兵衛

沼袋村

矢島友右工門

本郷春木町

市原屋卯兵衛

高円寺村

鈴木金蔵

松木村

松島伝治郎

植木万治郎

松木村同行七人

四ツ葉村

榎本文五郎

同 秋本權左工門

新橋

松原金右工門

新橋

竹内七右工門

片山村

岩崎善左工門

同

沢野清八

上鷺宮村

内田金左工門

同 早船助五郎

同 篠崎十左工門

新井村

新左工門

同 儀右工門

同行七人

(一段目)

(五段目)

高田半三郎

大沢太郎兵衛

同中井同行十人

太田左七

宇田川金治郎

江古田村同行十三人

豆腐屋長吉

新曾村

本橋十治郎

別所村

豊田屋平兵衛

文化十一申戌年

六月日建之

⑤ (台上正面)

武州豊島郡

椎名町

講中

⑥ (台下正面)

下落合村 先達

鈴木平左工門

世 高田五郎右工門

話 早水平右工門

人 宗右工門

荒井仁兵衛

榎本兵左工門

※ ※ ※

この碑塔からは、文化二一(一八一四)年段

階での、地域を越えた月三講の組織の広が

りを知ることができました。今後さらに分

析をしていきたいと考えています。(福岡)

# セピア色の記憶

## 第29回 目白駅は豊島区最古の鉄道駅なのだ!

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した昭和三〇年代と思われるJR目白駅前（豊島区目白三一一付近）の様子と、現在（二〇一三年二月撮影）の様子です。地図に示した\*印は撮影地点を、→印は撮影方向を示しています。上写真では、目白通りを千登世橋方面に走る車のデザインが懐かしいと思われる方もいらっしゃると思います。歩く人たちは皆半袖姿ですので、季節は夏。写真左奥に見える樹々は学習院構内のものです。



目白駅は、日本鉄道品川線（品川―赤羽）の駅の一つとして明治一八（一八八五）年三月一六日に開業しました。この区間に品川―目黒―渋谷―新宿―目白―板橋―赤羽のわずか七駅しかない時代です（下図右参照）。駅名となった「目白」は、江戸時代以来信仰を集めていた江戸の五色不動（目黒・目青・目黄・目白・目赤）の一つで、広く信仰を集めていた目白不動が、現在の文京区関口二丁目にあった新長谷寺（一九四五年廃寺）に祀られて



おり（現在は豊島区高田二丁目の金乗院）、この目白不動にちなんで駅名がつけられました。ただし、目白駅から目白不動がある新長谷寺までは約二・五キロの距離がありました。さて、みなさんにとっては意外かも知れませんが、目白駅は豊島区で最も早く開業した区内で一番古い鉄道駅です。当初の駅舎はプラットホームと同じ高さに設置されていましたが、大正八（一九一九）年に改築されて、日本で初めての橋上駅舎となり、その形は平成一二年完成の現在の駅舎へと引き継がれています。ちなみに、今や一日の利用者が平均二



七十一万人を数える巨大ターミナル駅となった池袋駅は、日本鉄道豊島線（池袋―田端）敷設時の明治三六年四月一日に、大塚駅・巣鴨駅とともに開業しました（図左参照、駒込駅は明治四三年一月一五日開業）。さらに、山手線が現在のよな環状運転となるのは、目白駅開業からちょうど四〇年後の大正一四（一九二五）年のことです。（秋山）

※目白駅開業当初の駅舎写真を探しています。ご存じの方は郷土資料館までご一報願います。



東松山市・青鳥城「虎御石」の見学



長野町野上の日本最大の板碑を背に記念写真をパチリ

郷土資料館では現在、仮称「芸術・文化資料館」の展示準備を進めています。中世の歴史展示については「板碑」が展示の大切な一角を占めると考えています。しかし、板碑が造られた時代の面影を現在の豊島区内に求めることは困難であり、その素材は区外に求めざるを得ません。そこで、埼玉県内の普段は見るのが難しい板碑を見学するとともに、その周囲の歴史的環境を考慮することで、展示準備の一助とすることを課題に、関心のある

区民の皆さんとともに学ぶことを目指して表記の歴史講座を企画しました。板碑は、中世（鎌倉時代～室町時代）に盛んに造立された供養塔で、時代が下るにつれて墓標に変容していくと考えられ、関東地方の広い範囲では緑泥片岩を材料としているため、青石塔婆とも呼ばれています。豊島区内でも各地に残されていますが（『豊島の板碑』一九八九、当館刊）、近年の区内での埋蔵文化財発掘調査により、駒込・巣鴨・雑司が谷・

長崎等で新たな発見が相次いでいます。さて、講座は10月27日・11月11日・27日の三日間で実施しました。初回の10月27日は、午前中に勤労福祉会館会議室で講座の狙いと板碑についてのガイダンスを行ない、午後は東武東上線東松山駅に集合して、東松山市内の青鳥城内に立っている虎御石と呼ばれる地上高三・七mの応安二年（一三六九）銘板碑（写真上）や、地上高二・五mの正

二回目は、西武池袋線元加治駅に集合。入間市円照寺収蔵の建長六年（一二五四）銘板碑をはじめとする六基の国指定重要文化財板碑他の板碑群を円照寺さまのご了解を得て実見させていただき、鎌倉武士加治氏の歴史の一齣を垣間見ることができました。円照寺を辞した後は飯能市願成寺に向かい、建長五年（一二五三）銘板碑等約10基の板碑を見学しました。三回目は、秩父鉄道樋口駅に集合。日本最大の板碑として知られている長瀬町野上下郷の、地上高五・四mを計る応安二年（一三六九）銘板碑を見学（写真下）。その後、この板碑の背後にある仲山城に登り、中世の城の姿の一端に触れると共に、この山全体が緑泥片岩で成り立っており、この地域が板碑の原石（緑泥片岩）産出地の一つであることを実感しました。残念なことに、この講座の受講者は僅か八名でしたが、短期間の間に、鎌倉・南北朝時代の優れた板碑を集中的に見ることによって、板碑の語る中世の歴史に思いを馳せることができました。そして受講されたすべての方が、区内ではとても考えられない大型板碑の迫力に圧倒され、鎌倉・南北朝時代の板碑に刻まれた梵字や文字の彫りの鋭さと美しさに心を奪われたものでした。

（橋口）

## 新連載「絵はがきは語る」(4)「来島良亮君記念碑」

■難工事だった千登世橋

明治通りは、東京都市計画街路改修事業として、昭和八（一九三三）年にほぼ完成し、その工事の一環として千登世橋が架設されました。当初明治通りは、神田川から約二二mの高低差がある急坂を一気に上り、目白通りと平面交差する計画でした。しかし東京府は、明治通りが新宿・池袋を連絡する唯一の直進道路であり、山の手の住宅地と神田川沿岸の小工業地帯の発展にとって重要な路線であるとの認識から、将来の交通量の激増に対処し、かつ坂道の勾配を緩和するため、切通しにして立体交差とする方法を採用



明治通りの掘削工事と千登世橋工事の様子  
黒沢勝氏提供 昭和7年9月撮影

たのです。その結果、掘削、擁壁、連絡道路などに長期間を要する難工事となりました。本事業は失業者救済の府直轄工事として施工されましたが、「特に美観に注意を払った」と自負した千登世橋は、土木史的価値の高い橋として「東京都の著名橋」に指定されています。

### ■来島良亮君記念碑

その難工事を象徴する記念碑が、千登世橋と小橋の間に建っています。昭和九年一月に建立された「来島良亮君記念碑」です。台座上にハンマーとシャベルを持つ二人の工夫像、中央に来島良亮の胸像レリーフと業績を記した碑文、下に環状道路のレリーフが配されています。

碑文には「昭和二年東京府土木部長ニ補セラル居ルコト六年力を都市計画ノ諸事業河川港湾ノ改修府県道ノ改良ニ致シ



業績顕著ナリ環状道路ノ如キモ亦君ノ勞苦ニ負フ所多シ」とあり、当時土木部長として尽力した来島良亮（一八八五〜一九三三）が、四九歳の若さで急逝したため、一周忌に際して記念碑が建立されたのです。左はその除幕記念に作成された絵はがき（四枚組）の一枚です。委員長香坂昌康府知事が挨拶を行い、盛大な除幕式だったことがわかります。

記念碑の製作者は大分県出身の彫刻家・日名子實三（一八九三〜一九四五）

です。日名子は、大正一〇年池袋に新居兼アトリエを構え、多くの作品を手がけましたが、この碑は千登世橋工事の歴史を今に伝えるとともに、豊島区ゆかりの彫刻家の作品としても、貴重な地域資料だといえるでしょう。（横山）



記念絵はがき「来島良亮君記念碑除幕式」  
昭和9年11月22日

## 編集後記

この冬は例年になく寒さが厳しく、すでにコタツに立てこもる日々が始まっている今日この頃です。風邪も大流行の様子ですので、皆さん、健康には充分にご留意下さい。

本号では、着々と進んでいる新館展示のための調査・整理作業の成果の一端をご紹介します。

さて、好評のうちに一月九日で「秋の收藏資料展」が幕を下ろし、二二日からは「冬の收藏資料展」がオープンいたしました。一昔前の生活道具・子供のあそび道具・古い通い徳利等を中心とした展示で、年配の方には懐かしい、小さい子供たちにとっては昔の生活を想像してもらえようような道具類を展示しています。会期は三月三十一日までの予定ですので、皆さまのご来館をお待ちしております。（は）

かたりべ  
No.108

2013年1月31日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4  
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan/>